

「あなたは良くなったのだから」
ヨハネによる福音書 5 章 1-17 節

エルサレムには「ベトザタ」と呼ばれる池がありました。そこには、たくさんの病人が集まっていました。この池には不思議な言い伝えがあったからです。それは、池の水が動いた時に一番最初に水に入った人は、どんな病気でも治るというものでした。

そこに 38 年も病気で苦しんでいる人がいました。イエスさまは「良くなりたいか」と尋ねられました。イエスさまの問いかけに彼はこう答えます。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです」と。なにか言い訳じみた文句を言っているようにも聞こえます。彼の気持ちも分からなくはありません。彼は 38 年間、来る日も来る日も、あきらめと羨望、絶望の入り交じった想いで、池に入っていく人々を眺め続けていたことでしょう。そんなことを繰り返すうちに、自分の人生に希望を持つことを放棄してしまっていたのかもしれない。

イエスさまは、この人の言い訳の言葉をかき消すかのように、こう命令されました。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」と。それを聞いてこの人はどうしたのでしょうか。「そんな無茶な!」と聞き流したのでしょうか。「できるわけないじゃないか!」と怒ったのでしょうか。彼はイエスさまの言葉に従いました。するとどうでしょう。なんと立ち上がる事が出来たのです。歩き出すことが出来たのです。

さて、ここで物語が終わるのであればハッピーエンドで終わったかもしれませんが、しかし、残念ながらそうはなりません。問題は、この日が「安息日」だったからです。

律法を忠実に守っていることを誇りとしていたユダヤ人たちは、彼をつかまえて言いました。「安息日に床を担ぐことは律法で許されていない」と。彼は答えます。「私の病気を治してくれた人が『床を担いで歩きなさい』と言ったから私はそれに従っただけです」と。するとまたユダヤ人たちは「じゃあ、お前に『床を担いで歩け』と言ったのは誰だ」と問いただします。それに対して、なんと彼は、38 年間も自分を苦しめ続けた病気を治してくれた人が誰だったのか知らないと言うのです。驚いたことに、この人は、人生でこれ以上の恵みを受けた時はないはずなのに、その癒しを行ってくださった方の名前さえ聞こうとしないのです。この人は自分が治って良かったということにしか目が向いていませんでした。誰が救ってくださったか、その方と自分は今どういう関係の中に招かれているのか、そのことは彼にとっては問題ではなかったのです。

その後、イエスさまは、先ほどの彼に再び会われてこう言われました。「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない」と。では、この人の罪とは何だったのでしょうか。それは「自己本位」「自己中心」という罪です。イエスさまが最初に「良くなりたいか」と聞いたとき、彼は「私を池に入れてくれる人がいない」と答えていました。「私が治らないのは、私を池に入れてくれない人のせいだ」と責任転嫁をしているのです。ユダヤ人たちに問い詰められたときにも、「私は自分から律法違反をしたわけではない、そうしろっていう人がいたんです」と責任転嫁をして自分を正当化しようとしているんです。それが「自己本位」という罪です。

さらに彼は、もう一つ大きな罪を犯すことになります。それはイエス・キリストを拒むと

いう罪です。彼は、キリストの言葉を信じて起き上がらせていただいたのです。ここで使われている「起き上がる」という言葉は、「復活する」とも訳される言葉です。つまり彼は、神なく死んだ状態から、キリストに繋がり、新しいいのちに生きる者へと復活させられたのです。新しく歩み出し始めたのです。しかし、その道を見失ってしまう。イエス・キリストという救い主を見失ってしまうのです。

けれども、この人には分りませんでした。イエスさまが何を自分に伝えようとしていたかを。彼は、自分を治してくれたのがイエスさまだと分かったと、ユダヤ人たちに「私を治してくれた人がわかりました。イエスという人です」と言いに行ったのです。これを聞いたユダヤ人たちはイエスさまに一斉に詰め寄ります。それに対して、イエスさまは静かに、しかし威厳をもって語られました。「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」と。

イエスさまは、こう言われたのではないのでしょうか。「安息日だからと言って、本当に神さまは7日目に休まれたとあなたたちは思っているのか。『今日は疲れたからもう何もしない』なんて言われる方だと思うか。私たちが苦しんでいても『今日は安息日だから知らない、明日ね』なんて言われる方だと思うのか。神さまは、今まで休まれたことなんて一日もない。命のために働き続けておられるのが神さまだ。だから、私も、父である神さまがなさるようにしているのだ。」そんなイエスさまの声が聞こえてきます。

安息日に、ベトザタの池のほとりで、38年間も自分の人生を呪い、他人を恨んで全く希望を失っていた人に、イエス様は近づいて、驚くべき御業を現してくださいました。私たちもまた、この人と同じような罪を犯す者であることを覚えます。ときに神様と正反対の方を向き、自己本位に生きることをしてしまいます。しかし、そんな私たちにイエスさまは出会ってくださり、声をかけてくださいます。再び希望へと立ち上がらせてくださるのです。

主イエス・キリストは、今日も私たちの罪を清め、許しの御言葉を与えてくださっています。「もう罪を犯してはいけない」と悔い改めへと導いてくださっています。その神さまの完全な平安の中で、神さまに生かされていることを心から感謝し、そして、神さまが招かれ、集めようとしている人々と共に生きる。私たちは、その和解の道を歩んでまいりたいと願います。